

エッセイ

# よもやま話(一)

山本文子

## また起こった霊現象

二〇一四年十一月の亡夫の月命日のことだった。玄関に施錠して外に出た私が十数分後に戻ったとき、下駄箱の上に置かれた花瓶の真っ白が視界に入った。花瓶の梅花模様が消えた？　と改めてよく見ると、クルリと後ろ向きになっていた。さらにその横に立つ男児キューピーちゃんも同じように後ろ向きではないか。それだけではない。並び立っていたはずの女兒キューピーちゃんは仰向けに倒れている。

一体これはどうしたことが。鍵は誰にも預けていないから、入ってこれる人はいない筈の我が家である。



この花瓶は、歌会始に同時入選のご縁で親しくなった女性からのプレゼント。キューピーちゃんは春日井の旧友が手編みの可愛らしい帽子や洋服を男児用、女兒用に区別して着せて贈ってくれたものである。もう二十年ぐらい前のことだが、私との電話中にこの旧友の目前に金粉が出始めたことについてそう友情が深まった。金粉の出現を目の当たりにしたご主人が「お前は金粉婦人だ」と驚いたそうである。こうした不思議現象は亡夫の初盆以来二十年以上も続いてきたから、もう私や末娘にとっては珍しいことではない。

「また、起こったね」  
 「うん、ご先祖さん今度は、何を言いたいのかな？」  
 「用心せよ」というメッセージだと思っ。選挙の公示が迫っている今こそ、百済問題を広めるチャンス。私は自分が作ったピラを思い切り広くへばらまこうと思っ張切り切っているところだから。それだけに用心を怠るな。二人そろって在宅の時であっても、安易に玄関を開けてはいけないよ、という意味だと思っ」  
 「そつだね、きつとそつだ。気をつけようね」  
 この現象は私達二人に勇気を与えてくれた。とても心強く思えた。百済問題を口にするのは危険なことだけれど、

めげずに頑張ろう、との思いが強まった。  
 「山本さんの説に納得、同感。だけど私は怖くて口に出せない。山本さんは勇気がある」  
 と言う人もいるが、確かに不思議体験がなかったならば、私とて恐ろしくて書けなかっただろう。霊現象が勇気を与えてくれるからこそ、こうして書き進めることができるのだと思っている。

## 靈に助けられた話

キューピーちゃんと花瓶が後ろ向きになる、という異変から私は連鎖的にある体験を思い出した。霊現象そのものは亡夫の初盆の日、末娘が大学三年の時から続出てきたのだが、次に書くのは大学を卒業して四日市の三菱系会社へ専門職として就職した頃のことである。社会人になった安心感から娘は大学時代の友人と二人で年の暮れに三重県内を一泊旅行する予定を立てて楽しんでた。そうしたときのこれは午前だったか午後だったかの記憶はないが、私の首にかけていた金の原石のペンダントがちやりんときな音をたてて和式便器の中に沈んでいった。あわてて拾い上げて時間を確認したところ、きっかり六時半だった。一体これはどういうことが、と不審がっていたら、引き続き

の異変が起こったのは夜六時半。

セットしていない目覚まし時計が突然鳴り始めたので、スイッチを押して止めた。ところが五分後にまた鳴り始めた。止める。鳴る。を繰り返すので妙だな、と気づいた私は時計屋へ電話をかけてそれ以上鳴ることのないよう止め方を教えてもらって、それに従い止めのボタンをしっかりと押した。ところが、止めたことを無視して、やっぱりきつかり五分後に鳴り続けたのである。鳴っている最中に親族からの電話が入ったので、「ベル聞こえますか？ おかしなことに止めても止めても五分置きに鳴るんですよ」と話し、相手が、確かに鳴ってるね」と答えたことが記憶に残っている。

結局時計は六時半から五分間隔で八回、七時五分まで鳴ったのである。六時半。八回。一体これは何を表わすのか？ 私は首を捻った。これまでの経験から言って、これも霊現象の一つに思えた。ご先祖は何を言おうとしているのだろうか？ 考えていてふと気づいたのが、娘が友人(女)と二人で三重県内を旅行する予定が翌週の二十八日であることだった。あつ、二十八日の旅行に関するメッセージだから八回鳴ったのだな。引き続き二回も六時半に奇妙なことが起こった、というのは「二十八日、六時半に危険が起

こるから用心せよ」というメッセージではないか。そう思えてきた私は娘に伝えた。「せっかくの楽しみを止めるのは心苦しいが、どうも気に掛かるから旅行を中止して欲しい。友人には悪いけれど、事情を伝えて了解を得るように」との申し出を受けて娘が友人と電話で話し合い、二人は私の言葉に従ってくれた。

さて、その後がどうなったかというと、実に驚くべし。娘の旅行予定先だった三重県の地で予定日だった二十八日に、娘たちが宿泊予定だった宿と一キロとは離れていない場所で夜の六時半頃に殺人事件が起こったのである。殺害されたのは若い女性だった。そのニュースを見た娘は「場所と時間からいって私たちが旅行してたら夕食のため外出していたと思う」と言った。やっぱり、ご先祖が示してくれたメッセージのお陰で、娘と友人は危険を逃れたように思えてならない。

私自身にしてももう十年以上薬を飲まず元気いっぱい歩き回っているのは、ご先祖の守護のお陰と思う。

ご先祖がこれほどに娘と私を守ろうとしてくれるのは何故か。「我がミナモトの子孫よ、どうか二人で力を合わせて明治維新の悪業や百済民族の野望を世に広め、日本国民

を百済民族の毒牙から救い出してくれ」と言ったその目的達成のために、力いっぱい私たち二人を守り助けてくれるに違いない。私たちはそれを固く信じている。平成の日本は、言論弾圧と卑劣な策略によって民主主義が破壊されつつある。非常に危険な国家に変わってしまった。敗戦直後の民主化された昭和時代の解放感は実に嬉しかった。あの時代へ何としても、日本を戻さねばならない。私も娘もそのために命懸けで頑張っている。

### 末娘・山本奈実が虐めに遭った話

それは三年前、私が拙著『増補版 私の不思議な体験』を刊行した頃に起こった。四日市の会社を辞めて大学院へ進んだあと、十年ほど前から大学に勤めてきた奈実が、自分の所属する学会に関連した組織内で、天皇家の血筋の偽りを暴露したのが事の始まりだった。暴露したその日、直ちに虐めが起こった。奈実に関するでっ上げの悪評がその組織内で広められた。調べで判明した限りでは、共に一流の某大学と別の大学との二人の女性教授が疑わしかった。名誉を傷つける目的のものだったが、全部嘘っぱちであることは明らかに分かるから実害はなかったものの、不愉快極まりない出来事だった。

その虐めに懲りて普通ならばすっかりおとなしくなるどころかと思うが、霊体験を重ねてきた奈実はへこたれない。逆に意気高揚して活動力を強めてしまった。そしたら虐めの四力月後に、今度は大学の授業に右翼の手先が潜り込んで、嫌がらせをする騒動があった。それは勤めている二つの大学で同時に起こった。十年來の勤めの中で初めての出来事だった。幸い、大学側の理解ある対応で事態は無事に収まった。ところがこれにも懲りない奈実が、歴史の偽りをはじめ、いまの政治の危機感を授業時間に表明し続けたために二〇一五年一月、とうとう来るべき時が来てしまった。大学の一つは継続更新がなされず、もう一つは天皇制の偽りを述べた行動を理由に、決定していた来年度の継続予定が打ち切られたのである。

明らかにその筋からの弾圧の結果だと思えるから、大学に対しては何の恨みもない。逆に迷惑をかけて申し訳なかったと私は思っている。これからだって娘はいつどこでどんな目に遭うことや、暗殺と策略の得意な百済系朝鮮人に支配されていることの恐ろしさが身に浸みた。これを読んで下さった人たちが、奈実のこれからの活躍ぶりを見守り続けて下さったら有難いと思う。

この悔しさを私は一篇の詩にまとめてみた。ここではそのうちの一部を紹介させて頂こう。全形は別のところで公表するつもりでいることも、書き添えておく。

天皇制批判をしたために 潰された人たち

事実無根 でっち上げの

農にはめられ 潰された人たち

次々と 潰された人たち

それが他人事ではなかった

なんとしたことが 二〇一五年一月の下旬

無名の庶民である 私の末娘

山本奈実までが 潰された

天皇制批判をしたがため

手始めは 事実無根の悪評を流され

第二弾は 右翼の手先から嫌がらせを受け

負けじと頑張ったがため 遂に

仕事を奪われて 末娘の収入がゼロになった

天皇制批判者は死ぬ ということが

我が子がやられたからには

親として 黙っておれない

私は 日本国民の皆さんが気づくまで

叫び続けるだろう

天皇制は怖い 天皇制は怖い と

### ミナモトの子孫

私と生活を共にし霊現象の幾つかを共に体験し、私と同じようにその身に金粉が出たことから私の百済観に共鳴するようになった奈実、私と協調して百済系帰化人の野望を広く人々に知らしめるべく大奮闘している。幾つもの切っ掛けがあつてそうなたわけだが、奈実の名前そのものの由来するところも大きい。前にも書いたことだが、再度触れたい。

「山本奈実」を下から読むと「みなもとやま」になるとに本人が気づき、「おや、よく気がついたね。そんなこと考えもせず三月七日に生まれたから付けた名前だったのに。出産予定日より三週間も延びての誕生だったのは、ご先祖の取り計らいだったのかな」と私に言わせたことをいま改めて思い出す。私の生家は血筋などまったく話題にしたこともない農家だったのが、兄のお見合い相手の父親教師（が自発的に調べ上げて生家が源氏であることを教えてくれた。そのお陰で私は自分の血筋を知ったわけである。

自分の氏名の逆さま読みが「みなもと」であると気づいた

末娘はこの話に興味を持ち、私の話と沢山の歴史資料を調べて推理した結果、生家が尾張源氏の本家である可能性があると教えてくれた。尾張源氏は清和源氏の名門であり、尾張地方に勢力を張った歴史の古い家だそう。曾祖父の名が「源三郎」であつたし、それ以前も「源」か「磯」の字のつく名前の先祖が多かつたこと、地域ではお家柄と見られていることを考えると、全く当たっていないわけではなさそうに思う。

丸に剣片喰の家紋もそれを表わしていた。家紋といえは思い出すことがある。生家の奥の部屋・納戸の鴨居に、三十五センチ角ほどのがっちりした黒っぽい箱が五個くらいだろつか、横に並んで掛けられていた。その箱はどれも同じきりと大きな丸に剣片喰が描かれていた。箱の中身は、取っ手つきの提灯だった。その提灯にも丸に剣片喰の紋がついていた。取っ手の形が少し異なるものの、それはあの時代劇に出てくる「御用だ、御用だ」の提灯を連想させた。がっちりとした堅牢につくられていたその提灯を思い出した瞬間、私は思わず大きな声を出した。

「あれだ。あれこそ先祖の血筋と活動の証拠品に違いない。明治維新の農民一揆の時、指揮を取った人たちが手に手に

掲げ持った提灯に違いない」

我が直系先祖を中心（だから我が家に収納）に親族たちが同志と思われる人々の先頭に立って叫び、走り回る姿が私の脳裏にくっきりと浮かび上がってきたのである。

提灯箱が掲げられている下の引き戸を開けると、そこには黒くて大きく横長の長持ちが置かれていた。中に客布団が入っていたことを思い出す。あの長持ちは徳川時代のお姫様の婚礼道具を連想させた。そういえば、お勝手に置かれていた古い総桐の箆筒も時代物だった。表面はつややかな焦げ茶色に塗られた板張りだったように思う。引き出し一つ一つの四隅には洒落た模様の薄い金属板が張り付いていた。引き出しは全部桐だが桐の中でも最高級の紫色でしかも分厚くてがっしりしたものだった。私が嫁ぐときに持ってきた薄くて白っぽい桐箆筒とは大違いに、古びてはいても壮重感があつて立派だった。妹がお嫁に行くときにもらって行ったと聞いたように思うが、提灯の入った箱はどうなったことや。もしも残っているならば、一個もらってきて我が家の家宝にしたい心境である。それらを思い起こすことで、私の中の先祖たちの存在感が一層に強まった。

### 心強い同志たち

「平和を求めたかったら、百済人による日本支配をやめさせることが絶対に必要」

という私の説にあちこちから賛同下さる人が増えてきた事がとても嬉しい。その殆どは七十代以上、つまり戦争体験者で、拙著『墓碑は語る』をお読み下さった人たちであり、図書館で拙著『私の不思議な体験』を読んだことが理解の始まりとなって出版社経由のお手紙を下された人もある。私の意見を広めることに自発的な協力を下さった人は十指に余る数となり、さらに全国各地から賛同のご意見を寄せて下さった人はその数倍に上った。

中でも特に嬉しかったのは、神道に属する高齢女性から頂いた賛同の言葉であった。神道が天皇制の支持母体であるとしても、決して神道に属する人の全員がそうであるわけではないことの意味になって貴重である。

「天皇制タブーは体制に反する者を痛めつける独裁手段だ。天皇制にしがみついて得をする奴らが天皇制タブーをくっつけている。

彼らは策略家だ」

と書いた私の文にこたえて

「その通りです。どれだけ大勢が天皇でメシを食ってるか。彼らは日本一の地主です」

ならないか、しっかりと見守っていて下さいね」

とお願ひしている私である。怖いからとて沈黙したら、おとなしい日本国民は虐げられる一方だ。日本人に不利な日本などあつてたまるか、の思いである。私はくじけない。

日本が百済系帰化人に支配されているとの確信を強めてくれた情報は色々あるが、中から二つほど紹介しよう。

我が家からさほど遠くない位置に、際立って大きな邸宅に住む勲三等受賞者の家がある。その家族から直接聞かされた話である。

「日本の大学の教授陣には、朝鮮や韓国系が多いけれど、朝鮮人は頭がいいからでしょうね」

えっ、何ですって？ 思わず私の心が叫んだ。朝鮮人は頭がいい？ そんな言葉を口にするのは朝鮮系の人か？ そういえば勲三等までは朝鮮系に限られていると聞いたことがある。あれは本当だったのか。なぜそんな言葉が出るのか。はーん。私の歌会始人選も朝鮮系優先の結果だと早合点しての仲間意識が言わせた言葉だな、と私は判断した。

この会話によって、やっぱり日本は百済人の天下なんだ」との思いが私に強く植え付けられた。それにしても怪しからん話だと思い、土着民族にだって、百済人に負けない優

と見事な応答を見せて下さった。更に

「憲法九条は残したいが、天皇をなくしたい。象徴はやめて欲しい」

と率直な言葉を頂いた。

「私は右翼がとつても怖いですが、言葉が通じないから怖いのです」

とおっしゃる。お言葉こそ公表させてもらつたけれど、決してお名前は漏らさない。

なかなかの有識者で、様々な業界で反体制者が片っ端から消されている日本の現状をしっかりと見据えておられ、右翼の八十パーセントは日本人ではない、との情報も得ていられる。容疑者が天皇と同じ血筋の場合、警察は活動を縛られ、情報化は不可能になる場合があると聞かされて、身の毛がよだつ思いになった。日本政府は弱い立場の日本国民を守ってくれないのか。こうしたことを書く私や末娘の身を案じて、どの人もこの人も「用心せよ、用心せよ」と警告下さる。

「恐ろしくて口に出せず歯軋り噛んでいる私たちの気持ちを、代弁下さる山本さん親子の勇氣に脱帽します」

と言われ

「ありがとう！ 私と末娘がこの先どういうことになるか

秀な人はいるのに、百済人に蹴落とされるのだ、と反論したい心境になってしまった。

もう一つの話は、名古屋の目抜き通りの店で働く女性から聞いた。

「この広小路通りに面した一等地が売りに出されると、たいてい朝鮮系の人に買い占められてしまうのが不思議でならなかったけれど、日本が百済系朝鮮人に支配されている、という山本さんの説から、私は初めて納得できました」

これも大きな収穫の一つだと思っている。

血筋優先の排他主義は、国の退化、腐敗を招くだろう。血筋や世襲によらない能力尊重の適材適所こそが国の発展に繋がると考えられる。民族にこだわらず、仲良く互いに融合、協力を図り、国民一人一人の長所を活かし合う日本でありたい。あらねばならない。

### 三つのグラフが示すもの

ここに三つのグラフを並べてみた。 は年間自殺者数の

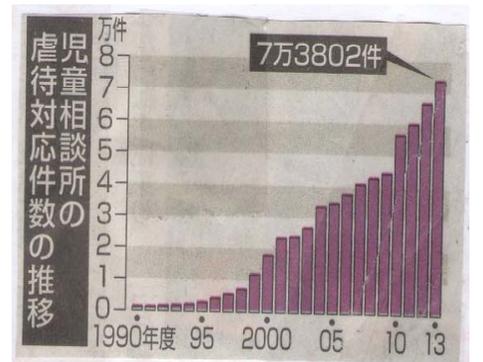
推移 は大企業の内部留保額と民間平均賃金の推移

は児童相談所の虐待対応件数の推移であつて朝日、赤旗、中日それぞれの新聞の切り抜きである。

この三つを重ね合わせることで、くっきりと見えてくる



ものがある。二〇〇〇年頃から民間企業に働く国民の多くが悲惨な生活を強いられるようになったこと、それと反比例して大企業の収益が増加してきたことである。経済界も政界も百済系帰化人の子孫に抑えられてしまっている、とこれまで何回も書いてきたことが、ここに見事に立証されている。



というのは、国民の生活が犠牲にされ始めた二〇〇〇年直前あたりから、政界の百済系帰化人の子孫の動きが活発になり、森、小泉、安倍氏らが次々と首相の座に就いて現在に至っているからだ。グラフによって「百

濟恐るべし」が一目瞭然である。二〇〇八年、安倍政権になってからその傾向が強まった。この人は百済人を太らせるために首相の座に就いたように見えてしまう。日本の国が百済人に食い荒らされていく、などと思うのは私の考え過ぎであろうか？

**国民をも殺したかった？**

ウォルフレン『人間を幸福にしない日本というシステム』は鋭い日本批判書である。日本は打ちひしがれた人々の国、日本人は富める国の貧しい国民である。よりよい人生を生きるために、あなたは日本の革新に手を貸すべきだ、というウォルフレンの的を射た見事な言葉に感嘆しきりの私である。次から次へと心を惹く言葉が続く。

日本の市民は、官僚が日本ほど放任されている大国はないという事実気付くべきだ。「審議会」は、日本の民主主義にとっては概して有膏。官僚制に仕える召使いのような人々で構成されている。市民は、制度としての審議会そのものを、日本の民衆を裏切るものとして徹底的に攻撃しなければならぬ。「記者クラブ」は民主国家にはふさわしくない。記者の批判力を麻痺させてしまう。記者クラブは「審議会」と同じく、日本の権力システムに既に深く組

**み込まれているのだ。**

天皇にも戦争責任がある、と発言したため長崎市長は撃たれた。昭和天皇の亡くなる前頃から右翼による脅しは日本中で行われてきた。天皇の神秘性を護持しようとする日本当局に対し、反発したキリスト教徒の知識人らも電話による脅しを受けて恐怖におののいた。国民が恐怖に囚われているような国は、その将来が危うい。明治の独裁者たちは、社会的階級秩序の自分たちより低位にある同胞たちに冷淡だった。そして酷使した。その権利を誰が彼らに与えたというのか。

ここで私は合の手を入れない。そつだ、そつだ。誰から与えられたものでもない。彼らは孝明天皇と睦仁親王を暗殺した血まみれのその手で権利を自分のものにしてしまったのだ。

ウォルフレンが言うように、民主的な体制のためには必ず対立が必要であるのに、最強の立場のものが他に押し付ける決定から逃れようがない日本。その最強の立場のものとは天皇制であり、天皇制支持者たちである。

天皇制を賛美する者には「ご褒美」出世コースが与えられる。が、天皇制批判者は引きずり降ろされる。最悪の場合には暗殺される。こうして彼らの天下が続いている。それが

日本の現状なのである。

小山寿『電磁波の正体と恐怖』(一九九六年版)から実に色々な知識を与えられた。より多くの人々に知って頂きたくて内容を紹介する。

携帯電話やパソコン、電子レンジその他から生じる電磁波は遺伝子を傷付ける恐れや、免疫力を低下させてウイルスや癌に対する抵抗力が失われる懸念が高まって、データが発表され始めている。欧米先進国ではかなり以前から問題視されている。なのに日本の官公庁や企業は平然たるもの。スエーデンやアメリカ各国始め先進各国が警告し続けているのに、日本の環境庁や資源エネルギー庁は無害説を唱えているが、果たして信じられるか。

エイズ禍を招いた非加熱血液製剤。水俣病の認定論争。発電用高速増殖炉「もんじゅ」のナトリウム漏れ事故。東京都西多摩郡日の出町のゴミ処理場の「データ公開」。「取材ビデオをオウム幹部に検閲させての放映中止。すべてが異様であった。

欧米先進国では因果関係がはっきりしなくても、慎重を期し危険を避ける行動を取る姿勢に徹している。なのに日

さを感じたと言われている。特攻兵器が皇族、すなわち百済人の提案によって作られたものであることにも注目したい。捕虜になることを禁止し自決を促す軍規もまた日本特有のものだった。ここで一言加えたいのが戦争当時の大日本帝国は、いまの北朝鮮にそっくりだったことである。

こうした日本の特異性はなぜ生じたか。為政者が百済民族であること。そのため彼らは土着民族である日本国民を殺したがっている。その証拠が列記してきた内容に表れているのではないか。自分達の子々孫々に及ぶ重大問題として、よくよく考えてみて欲しい。

### 私は警告したい!

戦後生まれの世代が、自分の生まれていなかった時の戦争について、日本擁護論を表明するのは甚だ宜しくない。政界、学界、文壇など著名人がそれを明示すれば、国際的日本の立場が悪くなる。右傾から洗脳されたらしいそれらの言論に接する度に、私は「知ったかぶりをするな!」と一喝したくなってしまふのだ。私は超生意気婆さんだから。

もう一つ言いたいことは、政界を始め草の根運動、平和団体、文化センターから九条の会に至るまでその中心部にスパイが送り込まれているが、一体どれだけの人が気づい

本は、対策を取ろうとはせず、事実をひた隠しにすることにだけ専念する。サリドマイドにしても薬害エイズにしても、小賢しい細工をして事実を隠したりしなければ起こらなかったのに日本は三百九人のサリドマイド児が生まれてしまった。危険を予測してサリドマイド剤の輸入を絶対に許さなかったアメリカには、サリドマイド児は一人も生まれていないのだ。この違いに注目したい。

日本の役人や企業の幹部たちは、事実をひた隠しにするばかりで、国民の健康を守るうとの意識がない。

「欧米先進国のデータと我が国の対応がここまで食い違つと、そこには何かがあると考えざるを得ない」

と著者は言う。この著者の目のなんと鋭いことよ。

「そつだ。そこには確実に何かがある。重大な何か。その何かを私は次のように考える。」

と前置きして、ここから私の考えを述べてみたい。

これは戦争体験者にしか分からないことかと思つが、あの戦争に対する日本の姿勢は極めて異様だった。それは特攻兵器。世界中の国が驚いた。片道燃料で飛び立ち必ず死なねばならない特攻隊員。国民の命をこれほど粗末にする為政者の姿勢に驚き、易々とそれに従つ国民性に薄気味悪

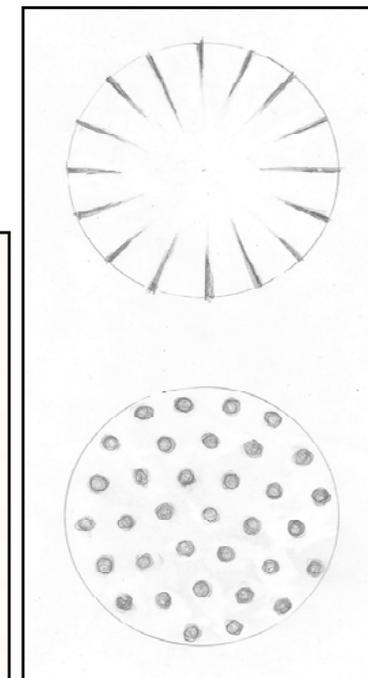
ていることが。民主党が無力になったのも、共産党が天皇制打倒を翻したのも、全てスパイの力によるものだった。

よくよく目を凝らして見ると、平和運動家たちの中心部のどこかに必ず「天皇制賛美者」が潜んでいる。言わば平和運動が天皇制反対へ移行するのを全力で防いでいるわけだ。そのしたたかさは想像を絶する。国民がぼんやりしていると、今に独裁軍国主義の大日本帝国が再建されてしまつてあろう。日本国民はまったくお人好し過ぎる。もっと賢くならねば駄目だと思つ。

### 久しぶりにビジョンが

以上の原稿を書き終えてほっと一息ついていた三月二十九日、突然視界一面に浮かんだのは二種類のビジョン(幻影)であった(図参照)。なんとそれは不気味な灰色ばかりで、一つ目は棒状のものに四方から取り囲まれる感じだった。次のは視界全体に円形が等間隔に散らばっていた。初めて登場した灰色。これはもう考えるまでもなく「四方八方に敵あり。用心せよ」の警告を先祖霊が発信してくれたのだと思えてしまった。形は整然としているのに、不気味な灰色。ということは、味方のふりをした敵に用心せよ、ということではなからうか。

今回出現したビジョン



以前出現したビジョン

ビジョン

Ⓐ 開いた目に見えたビジョン。

	開いた目の視界全体が黄色に染まって見えたことは何十回か数えきれない。ビジョンのほとんどが黄色。	なぜ、色によって現れる回数が違うのか。色は何を表すのか、あれこれと考えさせられた。
	視界一面が緑色に見えたのは数回ある。	
	赤色は2回ほど。	
	紫色は1回。	
	藍色は1回。	

Ⓑ 閉じた目に見えたビジョン。(その1例)



閉じた瞼裏に見える色の美しさはとても書き表せない。見た、びに至福感に満たされ、心が舞いあがる美しさである。さまざま色がスタンドグラスかネオンのような透明感をもって現れ、流動的に変化していくさまがまことに見事で、私は思わず歓声をあげてしまった。

それにしても過去に見てきた数々のビジョンとは、何と大きな違いであることよ。今回の灰色ビジョンについての判断材料のために、過去のビジョンについての説明を加えることにしたい。

あれは一九九八年初夏に始まって、二〇〇〇年頃までひっきりなしに続いた。目を開いているときだったり、閉じたときだったりするが、とても美しい幻影が見えたのである。二、三日おきに繰り返し見るときもあつた。黄、赤、緑と変化していく色彩と共に光あり、透明感あり、心奪われる美しさで、形も次々と変化していった。

目か脳に異常があるのではないが、心配になつた私は内科、眼科、精神科を次々に受診したが、結果はすべて異常なしてあつた。「あなたの脳の感受性が鋭敏だから見えるのであつて、病的なものでは決してありません」との太鼓判をもらったから、私は体験記を書くことができた。そうした美しい色調や変化に富む形状のビジョンを示されたことよつて、私は霊界の存在が信じられるようになったわけだ。図がその時のものである。ここでは色彩の表現のみにとどまり、形については省略した。

(二〇一五年三月三〇日)